

もくじ

特集：伝統の地にみなぎる創造の息吹を＝第7回国民文化祭・石川92開催＝

伝統の地にみなぎる創造の息吹を 4

■インタビュー

国民文化祭を文化レベル向上の基礎に 石丸 寛
〔インタビュー・構成 徳武 靖〕 6国民文化祭は生活を楽しむ力 福田繁雄
〔インタビュー・構成 高田都耶子〕 9季節感のある国民文化祭に 森 英恵
〔インタビュー・構成 高田都耶子〕 12第7回国民文化祭・石川92の概要 第7回国民文化祭
石川県実行委員会 15

第6回国民文化祭ちば'91を終えて 中村 哲 19

第8回国民文化祭いわて '93
開催準備本格化 千葉英寛 21

特色ある博物館・美術館紹介——③④

九州陶磁の情報センター

佐賀県立九州陶磁文化館 22

第9回国民文化祭みえ94

マスコットきまる
～愛称はミーム～ 24

・文化政策推進会議報告 25

・第39回日本伝統工芸展 28

展覧会紹介

■特別展 現代美術への視点——形象のはざまに 29

■特別展 アボリジニの美術 29

・芸術文化振興基金
ニュース……………30
・国立劇場ニュース……………31

表紙写真

第7回国民文化祭・
石川92
総合ポスター
製作／福田繁雄

題字デザイン※桑山弥三郎

国民文化祭を 文化レベル向上の基礎に

石丸 寛
氏に聞く

インタビュー・構成

徳武 靖



石丸 寛氏 ■指揮者
国民文化祭実行委員会委員
同企画委員会委員

私が最初にオーケストラの指揮を始めたのは、終戦直後の福岡ですが、その際に強く感じたのは、東京にはいくつもオーケストラがあるのに、どうして他の地方にはないのかという不思議な文化状況でした。ヨーロッパには、一都市一オーケストラという規範みたいなものがあります。日本でももっとオーケストラがあつてしかるべきじゃないかというのが、指揮者としての私の立ち上がりの考えでした。

当時はNHKの専属指揮者でした。各中央

まではこういうことはありませんでしたからね。そういうふうに、国民文化祭ではジャンルを超えて生き生きとした若者の場が創られてきています。

アマチュアオーケストラの目指す方向

前にいいましたように、ヨーロッパでは一都市一オーケストラというのが理想的になっています。しかし、プロのオーケストラは大変に経費がかかりますから、日本の各地にすぐにつくれといっても、実際には難しい。以前にある県知事さんに第三のオーケストラをつくつたらどうかと申し上げたことがあるんです。プロのオーケストラ、趣味的な集まりのアマチュアのオーケストラ、その真ん中にある第三のオーケストラを育てて、東京からオーケストラを呼ばなくても、県民、市民が十分に音楽を楽しむことができるレベルを目指す。いずれにしても、日本の文化状況を考える、私はもっとアマチュアに育つてほしいという気持ちでやっています。お父さんやお母さんがゆかた姿で子どもと一緒に行って、チャイコフスキーやベートーベンを楽しめるレベルになってほしいと思います。その意味で、国民文化祭に参加して、他の県のオーケストラと一緒に演奏した体験は、大

局には小さなオーケストラがあつて、歌謡曲の伴奏程度のことやっています。NHKからその訓練のために札幌へ行つてくれ、広島へ行つてくれといわれました。そのへんが私の若い頃のオーケストラとの関わりです。つまり、地方のオーケストラを育てる、一緒になつてつくっていくのが、最初の活動だったわけです。

ある日、文化庁から国民文化祭を始めたいので、手伝つてくれといわれた時に、私の場合はオーケストラですけれども、今お話ししたように、若い頃から地方文化を自分の人生の一つのテーマのようにしてきていたしたので、喜んでお引き受けしました。自分の考えと国民文化祭の趣旨とが全く一致したんです。

生き生きとした若者の場を創る

国民文化祭の発足当時には、そう本質的に大きな問題はなかったと思いますが、いろいろ細かい点についてアドバイスしました。例えば、全国からアマチュアのオーケストラを一堂に集めて演奏するにしても、開催県が選んだホールがまったく合わない。私もかつてそのホールで指揮したことがあります、適当じゃないでしょう」と申し上げますと、「ど

変貴重です。井の中の蛙といいますが、私たちの世界から一歩も出なかつたアマチュアのオーケストラが国民文化祭を経て、いろんなふうに変つてきているのは明らかです。

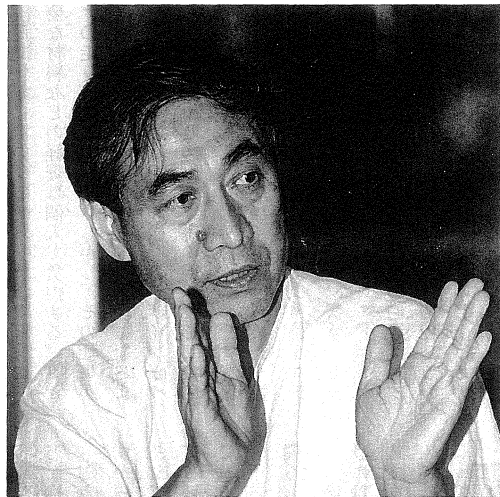
国民文化祭から裾野を広げて

国民文化祭も今年で七回目を迎えて、ここに来て、国民文化祭とはいったい何なのか」と原点に戻つて考えた時に、ある個人的な危惧をもつんです。「あそこの県よりうちの県は立派にやろう」という競争意識です。向こうが五千人集めたなら、こちらは七千人集めようとか、向こうが何億円使ったなら、うちももっと使つてやろうとか、他県に対する競争意識が強まって、打ち上げ花火のようになってしまふ。花火が終われば、元の木阿弥というのでは困ります。

国民文化祭は「祭」がつくのですから、お祭り騒ぎでもいいじゃないかという考え方もあ



徳武 靖氏
■教育ジャーナリスト



福田繁雄氏 ■グラフィックデザイナー
国民文化祭シンボルマークデザイナー

国民文化祭は 生活を楽しむ力

福田繁雄
氏に聞く

インタビュー・構成

高田都耶子

梅雨の晴れ間の七月の上旬、福田繁雄先生のアトリエにおうかがいした。コンクリートパネルの洒落た建物が先生のお住まいであり、アトリエである。全体に九度傾いているファッサードや遠近法の不思議な玄関にも先生の遊び心があふれている。二階のアトリエに上がらせていただくと、お庭に面して床から天井までガラス張り、大きく枝を茂らせた桂の木が目前に迫っていた。少し疲れぎみとおっしゃりながらも、いろいろと示唆に富んだ楽しいお話をいただいた。

福田先生は第一回目の開催当初から国民文化祭の総合ポスターを制作なさっている。「国民文化祭との関わりはシンボルマークをデザインしたことに始まります。その時、ポスターはどうするんですかと聞いたら、三浦長官（当時）も特別な計画はないとおっしゃる。オリンピックや万国博でもそれ相応のポスター計画をするのに、こんな大きなスケールで毎年行われると決まった国民的、全国的な文化祭で、ポスターがどんなものができるか分からない……というのではいけないんじゃないかと。それでは日本グラフィックデザイナー協会として協力させていただきますというとなつたんです。当時、私はちょうど理事だったものですから、みなさんに呼び掛けて計画しました。もちろん私も申し出た責任上、必ず一枚は作っていく。デザイナーにも無償で協力してもらい、印刷は凸版印刷さんで全面的に協力していただけることになりました。ですが私からもお願いして少しずつ予算をとっていただいているんです。そのいただいたお金は日本のグラフィックデザインの発展のために役立てようと協会に納めています。



高田都耶子氏
■エッセイスト

るでしょう。しかし、今の日本の文化状況から考えますと、このままでいいとは思えません。日本が経済大国になりますと、文化のレベルがそれに追いついていないことが非常によく目に見えてきます。文化のレベルが経済のレベルに追いついていないという日本人に対して、外国人が軽蔑していることは、ヨーロッパやアメリカに行ったら、すぐに感じとれるんですね。「君たちはいばっているけれども、音楽その他の文化的状況はどうしようもないじゃないか」と。オペラひとつ満足に育てられないじゃないか。プロのオーケストラだつて二十そこそこしかない。外国人に会うと、そういう軽蔑感がぱつと見えるんです。

国民文化祭は日本中を回っていくわけですが、一晩の打ち上げ花火ではなく、それを通して日本の文化を少しでも引き上げようと、為政者も、芸術家も、若者もみんな一緒に頑張って長いスタンスで考えていく。そういうプロセスにもっと関心を払うべきだと思うんです。何万人来た、何十万人来たとか喜びしている人も中にはいらつしやいますけれども、私個人としては「これでいいのかな」とここへきて反省しています。

競争意識が目立ってきたのは問題だといいましたが、スポーツでは一秒を争い、相手より自分が胸ひとつ前に出ようというランナーの競争意識がいい結果を生んでいるわけですから、競争意識がすべて悪いとは思っていません。ただ、気持ちのそつちのほうばかりにいつて、こつこつと文化状況を作り上げていくプロセスに対する関心や注意がなくなっていくのが、私は一番怖いと思うんです。

日本全体の文化状況について、石川県も千葉県もというように、みんなで話し合う場所があるかといつたら、なかなかそういう場はない。こうした現実の中で、やはり国民文化祭がこれからのように寄与していくか、これが大きな課題になるでしょうね。

国民文化祭への参加者、中でも制作者、別の言葉でいえばプロデューサーの意識が非常に大切です。ところが、今はプロデューサーが各個に活動していて、横のつながりができにくい。共通の問題意識をもって議論したり話し合つたりするたぐいの活動、事業というものがない。

もつと普遍性のある問題として取り上げるようにする。あるいは横の問題として、日本全国の文化状況を取り上げながら、現実には石川県であつたり、千葉県であつたり、熊本県であつたりというように、各個の県で取り組む。そのような横のつながりをつくるためには、現在の企画委員会とか実行委員会とは別のもの、もつと広い視野に立つた組織が必要だと思います。表に見えるものはもう見えていますから、背中側にもつと何か深いものがありはしないか話し合うようにしたらどうか。抽象論になってしまいましたが、経済大国といわれている状況のアンチテーゼ、反対のテーマである文化状況について、そのように話し合う必要があるかもしれません。

それから、国民文化祭を機会に、いいコンサートホールが出来たという話はまだ聞きませんね。頭の中で企画して実際にホールに行つてみたら、まったく不適当だったというようなところがまだかなり残つていると思います。施設の面についても、考えを広げていくことも必要でしょうね。



国民文化祭に協力するデザイナーは制作に必要な材料などの経費は個人で負担する。メセナの走りといえますね。しかし、その仕事は作者にとっては名譽となり、代表作になるように、今年も東京銀座の松屋のデザインギャラリーで石川県のポスターの展示会をしたんです。毎年やるわけにはいかないけど、そういうふうにはスポンサーを当ててあげられたら協力しがいがあると思っています。」

イベントのポスターの役割

さて、何かイベントが行われる時、ポスターは具体的にどんな役割を果たすのだろうか。「文化庁や開催県の方にいつも申し上げるのは、ポスターの使命は花火だ。一瞬の勝負なんだと。何があるの？ 国民文化祭だ！」とアピールできればいいんで、何が、どこで、いつ、というような細かいことは新聞やチラシでPRすればいいんです。しかし、主催者は欲張ってしまうから、これも入れたらこっちも入れなきゃとなる。ポスターですべての情報を機能させるというのは無理なんです。第一回目の時はだれも「国民文化祭」を知らなかったのだから制作する上でもいろいろと苦心があったのではないだろうか。「私の場合は国民文化祭とはどういうことなのかをまず考えて、ちよと投網をかけるよ

うにいろんな要素を捉えた後、消去法でどんな捨てていき、最後に残ったものでつくる。例えば石川県は「伝統と創造」がテーマですから、伝統的な品物で扇子を使いました。それで国民のお祭りだから色はカラフルにして、いろんな人たちが参加しているから、そこにリアルな顔や直線的な顔を描いてテーマのイメージを出したんです。目立つ、そして僕らしい作品であることも大事です。前年のがよかったからといって今年も同じというわけにはいきません。いつも新鮮さが問われるのです。」

制作の面のみならず、人との関係でご苦労



もおありだったのでは。「来年の開催地、岩手の準備委員の方たちはどうしても『いわて』とひらがなで描きたいというんです。僕は漢字で描いたほうが絵になると思うんですが、どうも理解してもらえない。岩手というのは神話で鬼が追われて逃げていく時に悔しくて手で岩をたたいて、その手のあとが岩手になった。だからいい意味じゃないというんです(笑)。」

地元の人たちが気に入っているというこの話にむしろ私は豪快さを感じたのであるが。「ところで僕は国民文化祭のロゴもつくっているんですが、ある県では町の印刷屋さんで打った写植を使ってしまうんですね。それは一年、二年で国民文化祭の担当者が異動してしまうのできちんと伝わっていないのしょうが。それから、なぜポスターのデザイナーが決まっているのか不審に思う人もいます。経緯を説明すると納得してくれるんですがね。」

あと、マスコットマークの使い方も気になります。「みかちゃん」とか「なみちゃん」とかそれ自体はかわいいのですが、何でもかんでも使おうとするのです。三十いくつのイベントのイメージマークにそれを当てはめようとして、なみちゃんに三味線やギターを持たせたりするのは、ちよと視覚的にも造形

的にも無理があると思います。」

全国にグラフィックデザイナー協会員は約千八百人いるそう。ポスターを作成するにあたって、開催県の人を必ず一、二名入れている。

「国民文化祭に参加することでデザイナーの地位の向上にもなっていく。デザイナーが行政の大きな仕事に携わるのはとてもいいことですし、全国的につながりが出てくるのもいいですね。国民文化祭が全国規模で行われていく中で、全国のデザイナーは緊張しているといっていると思います。」

デザインは文化

日本ではデザインは通産省の管轄下にあつて、ポスターデザインはなかなか文化として認めてもらえなかった。ところがヨーロッパやアメリカではポスターミュージアムもあるし、国際的なコンクールもたくさん行われていて、一つの文化として認識されている。

しかし、ここ三十年ぐらひは日本の作家も賞をとるようになり、国際的にも注目されるようになった。

「これは日本の産業が盛んになってきたという証なんです。デザインというのは産業が盛んじゃなければ必要ないわけですから、経済の発達とともにデザインも向上してきた。」

国立近代美術館でもコレクションの動きがあるということで、ようやく日本でもポスターの芸術的価値と保存する意味を認識し始めたようだ。現在、国際的なコンクールが行われているのは、ワルシャワ、チェコのプラハ、フィリピンのラトゥンモスクワ、富山など。

「若い人が制作した国民文化祭のポスターが国際的な賞をとるということはこれからは当然ありえます。国民文化祭のポスターも自分の作品として残り、発表できるわけですから、いいかげんに作らない。ただしあまりにも力を入れすぎると印刷に迷惑をかけるんです。十二色使うとか、金箔を使うとかね(笑)。」

ポスターはその国のその時代の一つの文化なんです。先日のロンドンのジャパンフェアでは相撲や歌舞伎が行きましたが、それとあわせて実はポスター展も行っています。百五十枚の新しいポスターがね。これはもう一つの文化ですよ。」

ポスターの文化

さて、国民文化祭はアマチュアの祭典という意味もあるけれど、ポスターの分野にアマチュアの参加はありえるのだろうか。

「開催する前年に、必ずアピールのためのポスターを作るんですが、埼玉県は一般公募のポスターを使いました。そのうちポスターも

各県で一般公募して、素晴らしいものが出てくるようになるのが望ましいと思います。」

国民文化祭はいつも古く新しい

福田先生は実際の運営には参画なさっていない。一人の観客として国民文化祭をどうご覧になっているか。

「国民文化祭は例えてみれば花火大会を隅田川でしたり多摩川でしたりしているようなもので、毎年同じことをしているわけだから、何回か他の県を見ている人にはちよと進歩していないように見えるでしょうが、その県では初めてで、でも、それによつて新しい風が入ってくる。今まで井の中の蛙だったのが全国から集まってくるすごい人々にも出会える。働くことでなく楽しむことにこんなに仲間がいるのかということが分かる、それが国民文化祭の意味でしょう。楽器をうまく弾くよりそれを楽しむこと、生活を楽しむことをみんなで考えようということでしょうね。お祭りの終わったあとにも楽しむということをみんなで一生懸命考える。日本人は楽しむ、遊ぶということが下手だからこういうのを機会にいい方向に進んでいくといいですね。」

大きな花火を打ち上げるより、小さくてもその県らしい花火を打ち上げる、それが国民文化祭のあるべき意味ということであろ

季節感のある国民文化祭に

森 英恵
氏に聞く



森 英恵氏 ■ファッションデザイナー
国民文化祭実行委員会委員
同企画委員会委員

インタビュー・構成
高田都耶子

東京青山、行き交う人波は今日も多い。表参道の入り口に建つハナエモリビルから、通りを見下ろすと、都会の喧噪が人ごとのようである。世界中を飛び回って活躍されている森先生は、ちょうどバリから帰国されたばかりであった。

先生には、国民文化祭の開催当初より、実行委員、企画委員としてお力添えを願ひ、専門のファッションを中心に、広く生活文化全般に至るご指導をいただいている。国民文化祭とファッションという二つが、どうつながりを持ち、どう展開されているのかをおたずねしたかった。まず、先生と国民文化祭との関わりといったところからお話しいただいた。

「年々大々的になってきて、昨年の千葉県の時に入場者が百万人を越えたそうですね。回を重ねる度に、華やかに盛大になってきて、開催地を希望する県が増えてきて、そうとう先まで決まっていますよね。」

さて、今までお手伝いさせていただいてきましたが、率直に申しまして、ファッションの立場から国民文化祭を手伝うというのは難しいですね。

私はファッションは、生活の中になくてはならないものだという考えでおります。文化庁から実行委員、企画委員にご指名いただいたの、和服にチャイナドレスと、なかなか個性豊かでしたよ。

最初は千葉県の方から「何かいいアイディアはないでしょうか」とご質問がありまして出した企画だったんですが、企画もコンテストもたいそう盛り上がりつつあったんです。ただ、少し欲をいいますと、参加者が圧倒的に女性だったこと。パーティーですからエスコートしてくれる男性と一緒に来ていただきたかったんです。女性だけの着こなし競争じゃなくて、それをみんなで楽しんで遊ぶというところまでしたかったんです。

これからのこういうことを積極的にやっていって、生活を楽しくする下地作りのお手伝いのできたらいいなと思ってます。専門家が参加して雰囲気を高めて、単なるお祭り騒ぎにならないようにしませんとね。」

さて、今年の開催地石川県は加賀友禅が特産品の一つである。先生がニューヨークのコレクションでデビューなさった時には、たしか友禅をお使いになった。

「ええ、ただしあれは京友禅でしたが。あの時は何か日本人としてのアイデンティティを表現しなくてはと、周りを見回して、伝統的な着物に至ったというわけですね。」

それにしても、当節その土地に伝わる技術やいいものがだんだん衰え、失われていく感

どかしさがいつもあるんです。それから、少しずつ近づいてきましたけれど、一般的な暮らしの中のファッションと私たちの描いているファッションとはちよつと距離があるように。それをどう説明し、いかに取り組むか、これも頭を悩ます一つです。」

ファッションは生活を楽しむ力

昨年の千葉県大会では、森先生が企画されたパーティーウェアの着こなしコンテストが大成功であった。

「千葉県は十一月の開催だったので参加させていただきました。非常に驚きましたのは、この企画に一般の方がすごく興味をもっていましたことでした。」

日本人はパーティーウェアに弱いものですが、ではみんな着こなしを競おうと企画したんですが、とてもおもしろかったんです。ご自分で縫ったドレスやお母さんが作ったもの



高田都耶子氏
■エッセイスト

たのも、きつそうというお考えがあつてのことだったのでしょうか。

当時の三浦朱門長官は、東京周辺だけでなく日本中からいろんなアマチュアのいいものが出てくれればおもしろいんじゃないかと企画されたと思います。

私自身も普段は東京中心で仕事をしていましたから、東京以外の地域のことを何も知らなかったもので、委員をお引き受けした時は、これをきっかけにしているんな所へ行つて、いろんな地方文化と接することができると思い、とても興味深く、またうれしくもありました。珍しい産物などをピックアップできたらなと、期待もありました。」

国民文化祭に対する興味はとても強いのだが、国民文化祭が開催される十月という時期はちょうどバリでコレクションのシーズンでもあり、思うように文化祭に参加できず、とても残念とおっしゃる。

「いつも時期が重なるんですね。ですから、せっかくのコンテンツの審査員も友人に頼んで、代理で行ってもらふことになったりましてね、申し訳なく思っているのですが。」

そんなこともあつて、運営委員会に出席し、お役に立ちたい、発言したいと思ひながらも、何をどう話せばいいのかわからないというも

じがありますね。本当にもったいないことです。それを今の時代に活かすところこそが、ファッションの力であり使命でもあると思います。産地から出てくるいいものを盛り上げていくには、やはり専門家が入っていかねばと思います。それによって、『自分たちの作っているこの布地がこんなに日常生活で使えとは思わなかった』、そういうふうになればいいんですが。三浦長官（当時）のお考えもそんなことであつたのではないのでしょうか。活性化、それがお手伝いできればと、勢いついてお引き受けしたんですもの。」

地方の文化の活性化、生活を楽しむこと。ファッションと国民文化祭はこれからいろいろと発展させていくことができる。どう具体化していくかは、アイディア次第であろうか。「繰り返しになりますが、ファッションというのは何も、着ることだけではありません。生活に時代の息吹を取り入れていくことです。日本では文化というところでも芸術になつてしまいがちでしょう。フランスではファッションをアートといいます。芸術というニュアンスとはちよつと違うんです。絵画などは自分の気の済むまで手を入れることができますが、ファッションは生きものですから、『もう少し手を入れたいな』と思つても、生きのいいうちに出さないといけない



発展させたい国際交流

千葉県では外国から合唱団を招き、国際交流を図る試みもなされた。東北よりもパリのほうが近いと感じる森先生にアドバイスをお願いした。

「東京があまりにも有名になつて、外国の人が日本に行くという時は日本というよりも東京に行くということですね。しかし、長い歴史の中で、それぞれの地方に育った独特の文化があるのですから、もっと広く日本を

知ってもらいたいですよ。

また、外国の人を呼んでくるというんじゃないで、何かおもしろそうだな』と向こうから見に来てくれるようになってほしいものです。」

季節感のある国民文化祭に

森先生は日程の都合で思う存分参加できないことを、とても残念がついていらつしやる様子である。

「運営委員会の時などはその地方から出席される方があつて、いろんな説明があるんです。それがとてもいい勉強になりますし、楽しくもあるんです。

盆栽がとても盛んな県があつたりしてね。盆栽も洋服も手作りということで、参考になることがあるんです。

それから、愛媛県が日本のタオルの生産のほとんどを担っているなんてことも、運営委員会です。

最後に勝手なことを申し上げれば、開催地によつて桜の季節がいいとか蟬しぐれの頃がいいというように、その地に一番適した時期に開催するというのも、何だか国民文化祭でその県らしさを出せる一つの案にはなりませんか。」

編集後記

筆者が以前訪れた米国オレゴン州のアッシュランドという町は小都市でありながら、世界各国から観客が集まる有名なシェイクスピア劇場があつて、町の人々の大きな誇りとなつてゐることに深い感銘を受けた。文化庁では、従来から地域文化の振興のための諸施策を展開し、今年度からは新たに新文化拠点推進事業、ジャンル別専用ホール

(Y)

「文化庁月報」九月号

(通巻第二八八号)
平成4年9月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社ぎょうせい
本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田区新富区西五軒町4丁目2番
電話 〇三三二六八二二四(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

定期購読のおすめ

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

定価一九〇円(本体一八四円)(送料四六円)
年間購読料二、二八〇円(税込)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業第二課・宣伝係
☎(03)3269-4145 (ダイヤルイン)

●本誌は、文化庁の編集により発行しておりますが、掲載文は、あくまで個人の責任において、自由に書くことを連前としております。したがって本誌の見解は、文化庁の見解ではありません

©1992 Printed in Japan